

研究伝統として見たときの分析哲学と科学哲学の違い

小山 虎 (Tora Koyama)
大阪大学基礎工学研究科

本発表の目的は、分析哲学観の再検討である。特に、科学哲学（ないし **philosophy of science** の訳語として科学基礎論）との比較を通じて、歴史的観点から検討したい。

分析哲学と科学哲学の違いは明らかだと思われるかもしれない。分析哲学は特有の方法論（言語分析など）を持ち、特に英語圏で広く行われている哲学のスタイルのことである。それに対し、科学哲学は科学を対象とする哲学の下位分野である。つまり、分析哲学と科学哲学はカテゴリーとして異なっているのである。このような主張に異議を唱えるわけではないが、実は分析哲学を上記のように特有の方法論と結びつけることはあまり有意義だとは思われない。なぜなら、分析哲学者に共通する方法論があるという考えは幻想であるとすら論じられているからである (Preston 2007)。そこで本発表では、研究伝統 (**research tradition**) としての分析哲学に焦点を当てる。

「分析哲学」という言葉が、ときには哲学におけるある伝統を指して用いられることは、「分析的伝統 (**analytic tradition**)」という言葉がある程度流布していることからもうかがわれる。もし分析哲学を「分析的伝統」とみなすのであれば、科学哲学とのつながりは明白である。分析哲学も科学哲学も、歴史的には論理実証主義に由来すると多くの哲学者が考えているからである。

しかし、分析哲学を研究伝統として見ても、科学哲学とのつながりはまだ不明瞭な点が多々ある。たとえば、初期の分析哲学者として **G. E. Moore** の名前は必ず挙がるが、**Moore** と論理実証主義者や後の科学哲学者の間に何か共通点はあるのだろうか。

本発表で注目するのは、タイトルに「分析哲学 (**analytic philosophy**)」という言葉が入った最初の論文とされる (Beaney 2015) Nagel 1936 である。この論文では、分析哲学の中心地として、**Moore**、**Russell**、**Wittgenstein** のケンブリッジ、論理実証主義のウィーンとプラハ、ポーランド学派のワルシャワとルヴォフが挙げられている。

Nagel の「分析哲学」では、分析哲学の祖とされる **Moore**、**B. Russell**、**L. Wittgenstein** と共に、ウィーン学派とポーランド学派が並んでいるが、これは以下の二点で興味深い。(1) 現代の分析哲学の一般的イメージとおおよそ合致しているだけでなく、科学哲学（や科学基礎論）の範囲にも含まれる。(2) 三者はゆるやかな影響関係にある。**Wittgenstein** とウィーン学派の関係はいうまでもない。**Russell** と **A. Meinong** の間の論争も分析哲学の常識の一つだが、**Moore** のセンスデータ概念には **E. Husserl** の影響が指摘されている (Marion 2009)。**Meinong** と **Husserl**、そしてポーランド学派の祖 **K. Twardowski** はみな **F. Brentano** の弟子である。ウィーン学派とポーランド学派の間には交流があり **A. Tarski** がウィーン、**R. Carnap** がワルシャワを訪問している。

三者の関係はもっと密接なものであった可能性もある。**L. S. Stebbing** は「ケンブリッジ分析学派 (**Cambridge School of Analysis**)」の中心メンバーであり、**G. Ryle**

らと共に Analysis を創刊する一方で、Carnap をイギリスに呼び、統一科学国際会議 (International Congress of the Unity of Sciences) の組織委員を務めるなど、統一科学運動に大きく関わった。ポーランド学派もまた統一科学運動に大きく関わっている。1935 年にパリで開催された第四回統一科学国際会議には、Tarski をはじめ多数のポーランド人が参加していることが確認できる (Buhl 1936)。

しかし、大きな欠落もある。ベルリン学派である。もちろん H. Reichenbach は統一科学運動に参加しているが、イギリスやポーランドを訪問することはなかったようであり、アメリカ移住後も特に交流があった形跡はない。

加えて、以下の二点は特に注目に値する。(1) ベルリン学派と後継者たちは、ピッツバーグを中心にアメリカにおける科学哲学の中心的役割を果たしていると主張されている (Rescher 2006)。このことは特に、International Union of Philosophy of Science (現在の DLMPST) に Tarski が会長を務めた Association for Symbolic Logic が参加した一方で、Philosophy Science Association が参加しなかったことを考えると、分析哲学との距離が今でも大きいことを示唆している。(2) ベルリン学派は新カント派 (具体的には、マールブルグ学派の E. Cassirer と新フリース派の L. Nelson) からの影響が強いとされている (Milkov 2013)。Nagel の「分析哲学」でドイツ哲学との明らかにつながりがあるのはウィーン学派のみである。

以上から、研究伝統として見たときの分析哲学と科学哲学は、少なくとも 1930 年代には、前者は複数の国にまたがった複数の学派がゆるやかにつながった伝統だったのに対し、後者はドイツ観念論の影響下にある比較的孤立した伝統であり、特に新カント派の影響に関して大きく異なる、と結論できるように思われる。

文献

- Beaney, M., 2015, “Chronology of Analytic Philosophy and its Histography”, in M. Beaney, (ed.), *The Oxford Handbook of The History of Analytic Philosophy*, DOI: 10.1093/oxfordhb/9780199238842.013.0006.
- Buhl, A., 1936, “Review: *Actes du Congrès international de Philosophie scientifique*, Sorbonne, Paris, 1935. Actualités scientifiques. Fascicules 388-395”, *L’Enseignement Mathématique*, 35, 392-396.
- Marion, M., 2009, “Theory of Knowledge in Britain from 1860-1950: A Non-Revolutionary Account”, *The Baltic International Yearbook of Cognition, Logic and Communication*, 4, 1-34.
- Milkov, N., 2013, “The Berlin Group and the Vienna Circle: Affinities and Divergences”, in N. Milkov and V. Peckhaus (eds.) *The Berlin Group and the Philosophy of Logical Empiricism*, 3-32.
- Nagel, E., 1936, “Impressions and Appraisals of Analytic Philosophy in Europe, I”, *Journal of Philosophy*, 33(1), 5-24.
- Preston, A., 2007, *Analytic Philosophy: The History of an Illusion*, Continuum.
- Rescher, N., 2006, “The Berlin School of Logical Empiricism and Its Legacy”, *Erkenntnis*, 64, 281-304.